

Anosov 葉層の C^* -環の K-理論

都立大理 高井博司
(Hirosi Takai)

§1. 序

C^* -環の K-理論は、同型問題や指數定理と関連して、最近活発に研究されている分野であるが、その中で特に Connes [1] は次の注目すべき結果を出した： C^* -力学系 $(\mathcal{R}, \mathfrak{h}, \alpha)$ について、 \mathfrak{h} を单連結可解 Lie 群とするとき、接合積 $\mathcal{R} \times_{\alpha} \mathfrak{h}$ の K-理論 $K(\mathcal{R} \times_{\alpha} \mathfrak{h})$ と \mathcal{R} の K-理論 $K(\mathcal{R})$ との間に

$$(I) \quad K(\mathcal{R} \times_{\alpha} \mathfrak{h}) \simeq K^{\dim \mathfrak{h}}(\mathcal{R})$$

なる関係が成り立つ。更に (I) の系として、葉層 C^* -環 $C^*(M, \mathfrak{F})$ についても、 \mathfrak{F} が单連結可解 Lie 群の自由作用による軌道を葉とする葉層ならば、

$$(II) \quad K(C^*(M, \mathfrak{F})) \simeq K^{\dim \mathfrak{F}}(M)$$

が成り立つ。

一方 Kasparov [4] は独自に開発した KK-理論を用い

て、(I)を次の様に一般化した： C^* -力学系 (Ω, G, α) について、 G を従順的連結 Lie 群であるとし、 G_c はその極大コンパクト部分群とする。 V を G/G_c 上の G_c での余接ベクトル空間とし、 Ad_* を G_c の V 上への余隨伴表現とする。そのとき V から生成される Clifford 環 C_V 上への Ad_* の自然な拡張を α とすると、可分な C^* -環 B に対して、

$$(III) \quad KK(B, \Omega \times_\alpha G) \simeq KK(B, (\Omega \otimes C_V) \times_{\alpha \otimes \alpha} G_c)$$

が成り立つ。更に Ad_* がスピーアルならば、

$$(IV) \quad KK(B, \Omega \times_\alpha G) \simeq KK^{\dim G/G_c}(B, \Omega \times_\alpha G_c)$$

が成り立つ。

これら (I)～(IV) の結果をふまえて、本報告においては次の結果を示すことにする： M を（階数 1 の）局所対称空間の単位球面バンドルとし、 θ を M の Anosov 葉層とすると、(II) が成り立つ。証明の本質的部分は (III) による。

§2. 準備

M を (C^∞) 多様体、 θ を M 上の流れ（又は微分同相写像）とする。 θ が Anosov であるとは、 M の接バンドル $T(M)$ の部分バンドル E^s, E^u, E^c （又は E^s, E^u ）が存在して次の条件を満たすときをいう：

$$(I) \quad T(M) = E^s \oplus E^u \oplus E^c \quad (\text{又は } T(M) = E^s \oplus E^u)$$

$$(II) \quad \|d\theta_t|_{E^s}\| \leq C_1 e^{-tC_2} \quad (t \geq 0) \quad (\text{又は} \quad \|d\theta^n|_{E^s}\| \leq C_1 C_2^n \quad (n \geq 0))$$

$$(III) \quad \|d\theta_t|_{E^u}\| \leq C_1 e^{-tC_2} \quad (t \geq 0) \quad (\text{又は} \quad \|d\theta^n|_{E^u}\| \leq C_1 C_2^n \quad (n \geq 0))$$

$$(IV) \quad E_x^s = \mathbb{R} \frac{d\theta_t(x)}{dt} \Big|_{t=0} \quad (x \in M)$$

ただし (II), (III) において C_1, C_2 は 正の定数 (微分同相の場合には $0 < C_2 < 1$) である。又 $d\theta_t$ は θ_t の 微分を意味する。

そのとき M の葉層 $\mathcal{F}^s, \mathcal{F}^u$ で $T\mathcal{F}^s = E^s, T\mathcal{F}^u = E^u$ を満たすものが存在する。ただし $T\mathcal{F}$ は \mathcal{F} の接平面場である。

$\mathcal{F}^s, \mathcal{F}^u$ を M の Horocycle 葉層 という。更に、

$$W_x^{uu} = \bigcup_{t \in \mathbb{R}} \theta_t(W_x^s) \quad (x \in M, W_x^s \in \mathcal{F}^s)$$

$$W_x^{ss} = \bigcup_{t \in \mathbb{R}} \theta_t(W_x^u) \quad (x \in M, W_x^u \in \mathcal{F}^u)$$

とおくと、 W_x^{uu}, W_x^{ss} は M の部分多様体となり、 $\mathcal{F}^{uu} = \{W_x^{uu}\}_{x \in M}$, $\mathcal{F}^{ss} = \{W_x^{ss}\}_{x \in M}$ も M の葉層となる。これらを M の Anosov 葉層 という。 M 上の流れ θ から導入される Anosov (又は Horocycle) 葉層は、Tomter [7] により次の様なタイプに分けられる：

(I) 局所対称空間の単位球面バンドル M の測地線流 θ により導入。

(II) 可解多様体 M の極大ベキ零部分多様体の Anosov 微分同相写像の M への誘導流 θ により導入。

(III) 簡約可能 Lie 群のベキ零 Lie 群上への作用による半直積 Lie 群の格子群による剰余多様体 M の自然な流れ θ に

より導入。

本稿では (1) の場合のみを考える。即ち, G を実階数 1 の連結半単純 Lie 群 (中心有限) とし, その岩沢分解 $G = KAN$ に対して Riemann 対称空間 G/K を考える。その一様格子群 Γ をとり, 二重剰余空間 $\Lambda G/K$ を考えると, 階数 1 の局所対称空間になる。 M を $\Lambda G/K$ の単位球面バンドル $\pi(\Lambda G/K)$ とし, $\Lambda G/K$ の測地線 $\pi gK \rightarrow Tg(\exp tX)K$ ($g \in G, t \in \mathbb{R}$) の定める M 上の流れ θ は Anosov になる。ただし, $A = \exp tX$ とする。 θ による M の Horocycle 及び Anosov 葉層をそれぞれ $\mathcal{F}_H, \mathcal{F}_A$ と書くと次の命題が成り立つ:

命題 1. $(M, \mathcal{F}_H), (M, \mathcal{F}_A)$ は $\Lambda G/K$ 上の葉層化バンドルになり, ファイバーはそれぞれ $G/C_K(A)N, G/P$ である。ただし, $C_K(A)$ は A の K における中心化群であり, P は極小放物型部分群である。

G/K は单連結であるから $\Lambda G/K$ の基本群は Γ に同型になる。

よって夏目一高井 [5] より次の命題が成り立つ:

命題 2. $C^*(M, \mathcal{F}_H), C^*(M, \mathcal{F}_A)$ はそれぞれ $(C_0(G/C_K(A)N) \times_{\pi} \Gamma)_r, (C(G/P) \times_{\pi} \Gamma)_r$ に安定同型になる。ただし $(\cdot)_r$ は縮約接合積を意味する。又入は左移動作用を表す。

更に $C_K(A)N, P$ は従順的であるので次の系を得る:

系 3. $C^*(M, \mathcal{F}_H), C^*(M, \mathcal{F}_A)$ はそれぞれ $C(\pi(G) \times_r C_K(A)N),$

$C(\Gamma \backslash G) \times_{\beta} P$ に安定同型である。ただし, β は右移動作用を表わす。

§3. K-理論

先ず Kasparov の同変 KK-理論 のなかで、この節に必要な所を簡単に述べることにする。

$(\mathcal{O}, G, \alpha), (\mathcal{B}, G, \beta)$ を C^* -力学系とし, Hilbert \mathcal{B} -加群 \mathcal{E} と、その上の有界 \mathcal{B} -作用素の全体 $\mathcal{L}(\mathcal{E})$ 及びコンパクト \mathcal{B} -作用素全体 $\mathcal{C}(\mathcal{E})$ を考える。今 \mathfrak{F} から $\mathcal{L}(\mathcal{E})$ への準同型写像 φ と、(次数1の) G -連続作用素 $H \in \mathcal{L}(\mathcal{E})$ で次の条件を満たすものを考える:

(3.1) $[\varphi(a), H], (H - H^*)\varphi(a), (H^2 - 1)\varphi(a), (\tilde{\beta}_g(H) - H)\varphi(a) \in \mathcal{C}(\mathcal{E})$
 $(g \in G, a \in \mathcal{O})$ 。ただし、 $\tilde{\beta}$ は β の $\mathcal{L}(\mathcal{E})$ への自然な持ち上げである。今 (3.1) を満たす $(\mathcal{E}, \varphi, H)$ 全体を $\mathcal{E}_{\varphi}(\mathcal{O}, \mathcal{B})$ で表わし、特に (3.1) が全て 0 作用素であるものの全体を $\mathcal{D}_{\varphi}(\mathcal{O}, \mathcal{B})$ で表わす。そして $\mathcal{E}_{\varphi}(\mathcal{O}, \mathcal{B})$ の要素 $(\mathcal{E}_0, \varphi_0, H_0), (\mathcal{E}_1, \varphi_1, H_1)$ に対して、関係 $(\mathcal{E}_0, \varphi_0, H_0) \sim (\mathcal{E}_1, \varphi_1, H_1)$ を次の様に導入する:

① \mathcal{E}_0 から \mathcal{E}_1 への G -同変等距離同型 u (次数0の) で

$$\varphi_1(a) = u \varphi_0(a) u^{-1} \quad (a \in \mathcal{O})$$

を満たすものが存在する。(ユニタリ-同値性)

② $\mathcal{E}_{\varphi}(\mathcal{O}, \mathcal{B} \otimes C[0, 1])$ の要素 $(\widetilde{\mathcal{E}}, \widetilde{\varphi}, \widetilde{H})$ で

$$\tilde{\Sigma}_t = \tilde{\Sigma} \otimes_{B \otimes C[t], 1} (B \otimes C[t]), \quad \tilde{S}_t = T_t^* \circ \tilde{S}, \quad \tilde{H}_t = T_t^*(\tilde{H})$$

($0 \leq t \leq 1$) なるものが存在して

$$(\tilde{\Sigma}_0, \tilde{S}_0, \tilde{H}_0) = (\Sigma_0, S_0, H_0), \quad (\tilde{\Sigma}_1, \tilde{S}_1, \tilde{H}_1) = (\Sigma_1, S_1, H_1)$$

を満たす。(ホモトピー同値性) ただし, T_t^* は

$$T_t^*(\tilde{H})(\tilde{\xi} \otimes b_t) = \tilde{H}(\tilde{\xi}) \otimes b_t \quad (\tilde{\xi} \in \tilde{\Sigma}, b_t \in B \otimes C[t])$$

なる $\mathcal{L}(\tilde{\Sigma})$ から $\mathcal{L}(\tilde{\Sigma}_t)$ への制限準同型である。

$\mathcal{E}_q(\mathcal{A}, B)$ の同値関係 \sim による商空間を $\tilde{\mathcal{E}}_q(\mathcal{A}, B)$ と書き, $\mathcal{D}_q(\mathcal{A}, B)$ の $\tilde{\mathcal{E}}_q(\mathcal{A}, B)$ での像全体を $\tilde{\mathcal{D}}_q(\mathcal{A}, B)$ と書く。

今 $[\Sigma_1, S_1, H_1], [\Sigma_2, S_2, H_2] \in \tilde{\mathcal{E}}_q(\mathcal{A}, B)$ に対して,

$$[\Sigma_1, S_1, H_1] + [\Sigma_2, S_2, H_2] = [\Sigma_1 \oplus \Sigma_2, S_1 \oplus S_2, H_1 \oplus H_2]$$

とおくと, $\tilde{\mathcal{E}}_q(\mathcal{A}, B)$ は可換半群になり, $\tilde{\mathcal{D}}_q(\mathcal{A}, B)$ による剰余半群 $\tilde{\mathcal{E}}_q(\mathcal{A}, B)/\tilde{\mathcal{D}}_q(\mathcal{A}, B)$ は可換群になる。これを Kasparov の K-群 (又は KK-群) といい, $KK_q(\mathcal{A}, B)$ と表わす。

注意 1. $KK_q(\mathcal{A}, \mathcal{C}) = \text{Ext}_q(\mathcal{A}), \quad KK_q(\mathcal{C}, B) = K_q(B)$ である。

注意 2. $\mathcal{A}, \mathcal{B}, \mathcal{D}$ は C^* -環であり, それぞれ (α, β, δ なる) との作用があるとき, $KK_q(\mathcal{A}, \mathcal{B})$ から $KK_q(\mathcal{A} \otimes \mathcal{D}, \mathcal{B} \otimes \mathcal{D})$ への準同型写像 σ_δ で

$$(3.2) \quad \sigma_\delta([\Sigma, S, H]) = [\Sigma \otimes \mathcal{D}, S \otimes \text{id}, H \otimes \text{id}]$$

$([\Sigma, S, H] \in \tilde{\mathcal{E}}_q(\mathcal{A}, \mathcal{B}))$ なるものが存在する。

注意 3. \mathcal{A}_2 から \mathcal{A}_1 への準同型写像 π に対して, $KK_q(\mathcal{A}_1, \mathcal{B})$

から $KK_G(\mathcal{R}_2, \mathcal{B})$ への準同型写像 π^* で

$$\pi^*([\varepsilon, \varphi, \pi]) = [\varepsilon, \varphi \circ \pi, \pi] \quad ([\varepsilon, \varphi, \pi] \in \widetilde{\mathcal{E}}_G(\mathcal{R}, \mathcal{B}))$$

を満たすものが存在する。同様に \mathcal{B}_1 から \mathcal{B}_2 への準同型写像 γ に対して、 $KK_G(\mathcal{R}, \mathcal{B}_1)$ から $KK_G(\mathcal{R}, \mathcal{B}_2)$ への準同型写像 γ_* で

$$\gamma_*([\varepsilon, \varphi, \pi]) = [\varepsilon \otimes_{\mathcal{B}_1} \mathcal{B}_2, \gamma' \circ \varphi, \pi']$$

$([\varepsilon, \varphi, \pi] \in \widetilde{\mathcal{E}}_G(\mathcal{R}, \mathcal{B}))$ を満たすものが存在する。ただし, γ' は $\mathcal{L}(\varepsilon)$ から $\mathcal{L}(\varepsilon \otimes_{\mathcal{B}_1} \mathcal{B}_2)$ への G -準同型写像で

$$\gamma'(T)(\xi \otimes b_2) = T(\xi) \otimes b_2 \quad (T \in \mathcal{L}(\varepsilon), \xi \in \varepsilon, b_2 \in \mathcal{B}_2)$$

を満たす。

次に KK -理論で、基本的かつ最も重要な性質に次にあげる結果がある:

命題4. (積交叉性) $(\mathcal{R}_i, G, \alpha_i), (\mathcal{B}_i, G, \beta_i)$ ($i=1, 2$) (\mathcal{D}, G, δ) を C^* -力学系としたとき, $KK_G(\mathcal{R}_1, \mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{D}) \times KK_G(\mathcal{D} \otimes \mathcal{R}_2, \mathcal{B}_2)$ から $KK_G(\mathcal{R}_1 \otimes \mathcal{R}_2, \mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{B}_2)$ への写像 $\otimes_\mathcal{D}$ で次の条件を満たすものが存在する: C^* -力学系 $(\mathcal{R}_j, G, \alpha_j), (\mathcal{B}_j, G, \beta_j)$ ($j=1, 2, 3$), $(\mathcal{D}_j, G, \delta_j)$ ($j=1, 2$)

に対して, (i) $(x_1 \otimes_{\mathcal{D}_1} x_2) \otimes_{\mathcal{D}_2} x_3 = x_1 \otimes_{\mathcal{D}_1} (x_2 \otimes_{\mathcal{D}_2} x_3)$
 $(x_1 \in KK_G(\mathcal{R}_1, \mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{D}_1), x_2 \in KK_G(\mathcal{D}_1 \otimes \mathcal{R}_2, \mathcal{B}_2 \otimes \mathcal{D}_2), x_3 \in KK_G(\mathcal{D}_2 \otimes \mathcal{R}_3, \mathcal{B}_3))$

が成り立つ。注意2の $\otimes_\mathcal{D}$ について

$$(ii) \quad \sigma_{\mathcal{D}_2}(x_1) \otimes_{\mathcal{D}_1 \otimes \mathcal{D}_2 \otimes \mathcal{D}_2} \sigma_{\mathcal{D}_1}(x_2) = x_1 \otimes_{\mathcal{D}_2} x_2$$

$$(x_1 \in KK_G(\mathcal{R}_1, \mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{D}_1 \otimes \mathcal{D}), x_2 \in KK_G(\mathcal{D} \otimes \mathcal{D}_2 \otimes \mathcal{R}_2, \mathcal{B}_2))$$

及び

$$(m) \quad \sigma_{D_1}(x_1 \otimes_D x_2) = \sigma_{D_1}(x_1) \otimes_{D \otimes D_1} \sigma_{D_1}(x_2)$$

$$(x_1 \in KK_\varphi(\mathcal{O}_1, \mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{D}), x_2 \in KK_\varphi(\mathcal{D} \otimes \mathcal{O}_2, \mathcal{B}_2))$$

が成り立つ。ただし, $\mathcal{O}_\lambda, \mathcal{B}_\lambda, \mathcal{D}_\lambda, \mathcal{D}$ ($\lambda=1,2,3$, $\delta=1,2$) は可分な C^* -環とする。

実際, $x_1 = [\varepsilon_1, \varphi_1, F_1] \in KK_\varphi(\mathcal{O}_1, \mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{D})$, $x_2 = [\varepsilon_2, \varphi_2, F_2] \in KK_\varphi(\mathcal{D} \otimes \mathcal{O}_2, \mathcal{B}_2)$ に対して、次の様に $x_1 \otimes_D x_2$ を定義する:

$$(a) \quad \varepsilon_{12} = (\varepsilon_1 \otimes \mathcal{O}_2) \otimes_{\mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{D} \otimes \mathcal{O}_2} (\mathcal{B}_1 \otimes \varepsilon_2)$$

(b) $\varphi_1 \otimes_D \varphi_2$ は $\mathcal{O}_1 \otimes \mathcal{O}_2$ から $\mathcal{L}(\varepsilon_{12})$ への準同型写像であり、 $\varphi_1 \otimes_D \varphi_2 = \varphi_2 \circ (\varphi_1 \otimes \text{id})$ となる $\mathcal{L}(\varepsilon_1) \otimes \mathcal{O}_2$ から $\mathcal{L}(\varepsilon_{12})$ への自然な準同型写像 φ_2 がこれら。

(c) $\mathcal{L}(\varepsilon_{12})$ の元 M_δ ($\delta=1,2$) で、 $M_\delta \geq 0$, $M_1 + M_2 = 1$, かつ $[M_\delta, \varphi_2(F_1 \otimes 1)], [M_\delta, 1 \otimes F_2], [M_\delta, \varphi_1 \otimes \varphi_2(a_1 \otimes a_2)], \gamma_\delta(M_\delta) - M_\delta, M_\delta a_\delta \in C(E_{12})$ ($a_\delta \in \mathcal{O}_\delta$ ($\delta=1,2$), $\delta \in \mathcal{G}$) を満たすものに対して、

$$F_1 \#_D F_2 = M_1^\delta \varphi_2(F_1 \otimes 1) + M_2^\delta (1 \otimes F_2) \in \mathcal{L}(\varepsilon_{12})$$

とおくと、 $x_1 \otimes_D x_2 = [\varepsilon_{12}, \varphi_1 \otimes_D \varphi_2, F_1 \#_D F_2] \in KK_\varphi(\mathcal{O}_1 \otimes \mathcal{O}_2, \mathcal{B}_1 \otimes \mathcal{B}_2)$ は M_δ の取り方に依らない。この写像 \otimes_D について (i) ~ (iii) が成り立つ。ただし、 γ_δ は $\delta \in \mathcal{G}$ の ε_{12} 上への作用の $\mathcal{L}(\varepsilon_{12})$ への持ち上げを意味する。

この積に関して、次の重要な結果がある。

命題 5. $\mathcal{O}_\lambda, \mathcal{D}_\lambda$ ($\lambda=1,2$) を可分な C^* -代数、 \mathcal{B} を C^* -代数とする。

もし $\alpha \otimes_{D_2} \beta = 1_{D_1}$ を満たす $\alpha \in KK_g(D_1, D_2)$, $\beta \in KK_g(D_2, D_1)$ が存在すれば, $\gamma = \beta \otimes_{D_2} \alpha$ は環 $KK_g(D_2, D_2)$ のベキ等元になり,
 $KK_g(\Omega, B \otimes D_2)$ から $KK_g(\Omega, B \otimes D_2)$ への準同型写像 $\otimes_{D_2} \alpha$ は 1 対
1 写像である。更に $\otimes_{D_2} \alpha$ の像 $Im(\otimes_{D_2} \alpha)$ は

$$Im\gamma = \{x \in KK_g(\Omega, B \otimes D_2) \mid x \otimes_{D_2} \gamma = x\}$$

に一致する。同様に, $\otimes_{D_2} \beta$ は $KK_g(\Omega, B \otimes D_2)$ から $KK_g(\Omega, B \otimes D_2)$ への上への準同型写像であり, その核 $Ker(\otimes_{D_2} \beta)$ は

$$Ker\gamma = \{x \in KK_g(\Omega, B \otimes D_2) \mid x \otimes_{D_2} \gamma = 0\}$$

に一致する。そして

$$KK_g(\Omega, B \otimes D_2) = Im\gamma \oplus Ker\gamma$$

が成り立つ。もし $\gamma = 1_{D_2}$ ならば, $\otimes_{D_2} \alpha$, $\otimes_{D_2} \beta$ は同型写像になる。

上記命題 5 の仮定を満たす (D_j, G, δ_j) ($j=1,2$) 及び α, β は次の様にして作られる: 今 G を従順的連結 Lie 群, G_c をその極大コンパクト部分群とする。 $\mathfrak{g} = T^*(G/G_c)$ を G/G_c 上の余接バンドルとし, $C_{\mathfrak{g}}(G/G_c)$ を \mathfrak{g} に随伴して決まる Clifford バンドルの断面で, 無限遠点で 0 にあるものを全体の成す C* 環とする。即ち, V を G/G_c 上の G_c での余接ベクトル空間とし, C_V を V から生成される Clifford 環とすると, $C_{\mathfrak{g}}(G/G_c)$ は G から C_V への連続関数で次の条件を満たすものを全体である:

$$(i) \quad f(gh) = \sigma_h^{-1} f(g) \quad (g \in G, h \in G_c)$$

$$(1) \quad \|f(g)\| \rightarrow 0 \quad (gG_c \rightarrow \infty),$$

ただし ϕ は G_c の V への余隨伴表現 Ad_* の G_c 上への自然な拡張である。今 G/G_c 上の L^2 -調和形式全体 $L^2(\Lambda^*(G/G_c))$ の成す Hilbert 空間を考える。(以下 \mathcal{H} と書く) $C_c(G/G_c)$ から $\mathcal{L}(\mathcal{H})$ 上の準同型写像 ϕ を $\phi(w) = dw + d_{w*}^*$ ($w \in \Omega^1(G/G_c)$) を満たすように定義する。ただし, dw は w による外積作用素を表わし, d_{w*}^* は w の共役 1-形式 w^* の外積作用素 d_{w*} の共役作用素を意味する。 δ を G/G_c 上の滑らかな, 台がコンパクトである形式上の外微分とし, $\Delta = \delta\delta^* + \delta^*\delta$ をラプラシアンとする。そのとき $\frac{\delta + \delta^*}{(1 + \Delta)^{1/2}} \in \mathcal{L}(\mathcal{H})$ が成り立ち \mathcal{H} 上への作用によると $\mathcal{L}(\mathcal{H})$ 上への自然な持ち上げに関して G -連続となる。

$$\alpha = [\mathcal{H}, \phi, \frac{\delta + \delta^*}{(1 + \Delta)^{1/2}}]$$

とおくと, $\alpha \in KK_G(C_c(G/G_c), \mathbb{C})$ となる。また $\beta(x)$ を G_c から $x \in G/G_c$ への測地距離 ≥ 1 , $\theta = \frac{\beta \delta \beta}{(1 + \beta^2)^{1/2}} \in \Omega^1(G/G_c)$ とおき, $\varepsilon = C_c(G/G_c)$, $L_\theta f = \theta f$ ($f \in \varepsilon$) とするとき,

$$\beta = [\varepsilon, id, L_\theta]$$

は $KK_G(\mathbb{C}, C_c(G/G_c))$ となり, $\alpha \otimes_c \beta = 1_{C_c(G/G_c)}$ が成り立つ。

更に, G が従順的より, $\gamma = \beta \otimes_{C_c(G/G_c)} \alpha = 1_{\mathbb{C}}$ となる。実際, もし $\dim G = 1$ ならば, $G = \mathbb{R}$ 又は T^1 。 γ は \mathbb{Z} 又は $\mathbb{Z}[x, x^{-1}]$ のべき等元より, $\gamma = 1$ 。 $\dim G \leq n$ について $\gamma = 1$ が成り立つと仮定する。もし $\dim G = n+1$ ならば, G は従順的より,

半単純ならばコンパクトであるから, $\gamma = \beta \otimes_{C_c(G/H)} \alpha = 1$ となるよう遷べる。半単純でないならば, T^p 又は \mathbb{R}^2 に同型である G の正規部分群 N が存在する。 $N = T^p$ ならば, $N \subset G_c$ あり, $\dim G/N \leq n$ に対して帰納法より $\alpha_{G/N} \in KK_{G/N}(C_c(G/G_c), \mathbb{C})$ と $\beta_{G/N} \in KK_{G/N}(\mathbb{C}, C_c(G/G_c))$ で $\alpha_{G/N} \otimes_c \beta_{G/N} = 1_{C_c(G/G_c)}$, $\gamma_{G/N} = 1_G$ となるものが存在する。 $KK_{G/N}(\mathbb{C}, \mathcal{B})$ から $KK_G(\mathbb{C}, \mathcal{B})$ への自然な準同型写像により結論が成り立つ。 $N = \mathbb{R}^2$ ならば,

$\alpha_{G/N} \in KK_{G/N}(C_c(G_cN/G_c), \mathbb{C})$, $\beta_{G/N} \in KK_{G/N}(\mathbb{C}, C_c(G_cN/G_c))$ で $\gamma_{G/N} = 1$ となるのをとり, $\alpha'_{G/N} = \pi_{G/N, G} \circ \sigma_{C_N}(\alpha_{G/N}) \in KK_G(C_c(G/G_c), C_c(G/G_c))$, $\beta'_{G/N} = \pi_{G/N, G} \circ \sigma_{C_N}(\beta_{G/N}) \in KK_G(C_c(G/G_cN), C_c(G/G_c))$ を考える。ただし, $W = T_{G/N}^*(G/G_cN)$ であり, $\pi_{G/N, G}$ は $KK_{G/N}(C_c(G_cN/G_c) \otimes C_W, C_W)$ [又は $KK_{G/N}(C_W, C_W \otimes C_c(G_cN/G_c))$] から $KK_G(C_c(G/G_c), C_c(G/G_cN))$ [又は $KK_G(C_c(G/G_cN), C_c(G/G_c))$] への自然な準同型写像である。これらから, $\alpha = \alpha'_{G/N} \otimes_{C_c(G/G_cN)} \tau_{G/N, G}(\alpha_{G/N})$, $\beta = \tau_{G/N, G}(\beta_{G/N}) \otimes_{C_c(G/G_cN)} \beta'_{G/N}$ とおくと, $\alpha \otimes_c \beta = 1_{C_c(G/G_c)}$, $\gamma = \beta \otimes_{C_c(G/G_c)} \alpha = 1_G$ が成り立つ。ただし, $\tau_{G/N, G}$ は $KK_{G/N}(C_c(G/G_cN), \mathbb{C})$ [又は $KK_{G/N}(\mathbb{C}, C_c(G/G_cN))$] から $KK_G(C_c(G/G_cN), \mathbb{C})$ [又は $KK_G(\mathbb{C}, C_c(G/G_cN))$] への自然な準同型写像である。

命題 6. G を従順的連結 Lie 群とし, G_c をその極大コンパクト部分群とする。 ξ を G/G_c 上の余接バンドルとするとき,

$\alpha \in KK_G(C_c(G/G_c), \mathbb{C})$, $\beta \in KK_G(\mathbb{C}, C_c(G/G_c))$ で, $\alpha \otimes_c \beta = 1_{C_c(G/G_c)}$,

$\beta \otimes_{C_c^*(G/G_c)} \alpha = 1_G$ を満たすものが存在する。

注意4. 一般に、従順的連結局部コンパクト群についても命題は成り立つ。

上記命題6により、本節の主結果である次の命題を示すことが出来る：

命題7. (\mathcal{A}, G, α) を C^* -力学系とし、 \mathcal{A} を可分な C^* -環、 G を従順的連結 Lie 群とするとき、 $\tilde{\alpha} \in KK((\mathcal{A} \otimes C_V) \times_{\alpha \otimes \sigma} G_c, \mathcal{A} \times_\alpha G)$, $\tilde{\beta} \in KK(\mathcal{A} \times_\alpha G, (\mathcal{A} \otimes C_V) \times_{\alpha \otimes \sigma} G_c)$ で、 $\tilde{\alpha} \otimes_{\mathcal{A} \times_\alpha G} \tilde{\beta} = 1_{(\mathcal{A} \otimes C_V) \times_{\alpha \otimes \sigma} G_c}$, $\tilde{\beta} \otimes_{\mathcal{A} \otimes C_V \times G_c} \tilde{\alpha} = 1_{\mathcal{A} \times_\alpha G}$ を満たすものが存在する。ただし、 $V = T_{G_c}^*(G/G_c)$ 。

実際、 $KK_g(\mathcal{A}, \mathcal{B})$ から $KK(\mathcal{A} \times_\alpha G, \mathcal{B} \times_\alpha G)$ への自然な準同型写像を考えて、 \mathcal{A}, \mathcal{B} を $C_c^*(G/G_c)$, G に対して適用すると、命題6より結論を得る。

系8. 可分な C^* -環 \mathcal{B} に対して、 $KK(\mathcal{B}, \mathcal{A} \times_\alpha G)$ は $KK(\mathcal{B}, (\mathcal{A} \otimes C_V) \times_{\alpha \otimes \sigma} G_c)$ に同型である。

§4. Thom 同型

本節では §2 で扱った葉層 C^* -環の K-理論を §3, 系8 を用いて取扱うことにする。

M を局部対称空間の単位球面バンドルとすると、連結半单纯 Lie 群 G の岩沢分解 $G = KAN$ と、 G の一様格子部分群 Γ について、 $M = T(MG/K)$ と書ける。 M の Horocycle 及び Anosov 葉層

を $\mathcal{F}_H, \mathcal{F}_A$ とする。ただし、これらは $\dim A = 1$ の仮定のもとで作られる。系 3 より、 $C^*(M, \mathcal{F}_H), C^*(M, \mathcal{F}_A)$ はそれぞれ $C(\pi \backslash G) \times_{\mathbb{R}} C_K(A)N$, $C(\pi \backslash G) \times_{\mathbb{R}} P$ に安定同型である。よって、 K -理論 $K(C^*(M, \mathcal{F}_H)), K(C^*(M, \mathcal{F}_A))$ は K -理論 $K(C(\pi \backslash G) \times_{\mathbb{R}} C_K(A)N), K(C(\pi \backslash G) \times_{\mathbb{R}} P)$ にそれぞれ同型である。

G の Lie 環 \mathfrak{g} が $SL(2, \mathbb{R})$ に同型でなければ $C_K(A)$ は K の連結開部分群になる。そのとき、 $C_K(A)N, P$ は従順的連結 Lie 群になる。これらの極大コンパクト部分群は $C_K(A)$ であるから、系 8 より $K(C(\pi \backslash G) \times_{\mathbb{R}} C_K(A)N), K(C(\pi \backslash G) \times_{\mathbb{R}} P)$ は $K((C(\pi \backslash G) \otimes_{\mathbb{R}} C_V) \times_{\mathbb{R}} C_K(A))$, $V = n_R^*, \mathfrak{n}_R^* + n_R^*$ にそれぞれ同型である。ただし、 n_R^*, \mathfrak{n}_R^* は N, A の Lie 環 n, \mathfrak{n} の実双対空間を意味する。もし $\dim_{\mathbb{R}} V = 2n$ ならば、 C_V は単純になり $M_{2n}(\mathbb{R})$ に同型である。 $C(\pi \backslash G) \cong C(\pi \backslash G) \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{G}$, $M_{2n}(\mathbb{G}) \cong M_{2n}(\mathbb{R}) \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{G}$ より $C(\pi \backslash G) \otimes_{\mathbb{R}} M_{2n}(\mathbb{R}) \cong C(\pi \backslash G) \otimes_{\mathbb{R}} M_{2n}(\mathbb{G})$ となる。よって、その双対空間 $(C(\pi \backslash G) \otimes_{\mathbb{R}} M_{2n}(\mathbb{R}))^\wedge$ は $\pi \backslash G$ に同一視出来る。今 \mathfrak{so}_{2n} の $\pi \backslash G$ への作用 $\hat{\delta}$ を考えると、 $\pi \cap C_K(A) = \{e\}$ より、自由作用になる。よって $\hat{\delta}$ の $\xi \in \pi \backslash G$ での安定群 $C_K(A)_\xi$ は自明になる。 $C_K(A)$ はコンパクトだから、 \mathfrak{so}_{2n} は (Fell の意味で) 清らかであるので、竹崎 [6] により $(C(\pi \backslash G) \otimes_{\mathbb{R}} M_{2n}(\mathbb{R})) \times_{\mathfrak{so}_{2n}} C_K(A)$ の双対空間は $(\bigcup_{\xi \in \pi \backslash G} (C_K(A)_\xi, \omega_\xi)^\wedge) / C_K(A)$ に同一視出来る。ただし、 $(C_K(A)_\xi, \omega_\xi)^\wedge$ は $C_K(A)_\xi$ の既約な ω_ξ -射影表現の同値類

の全体である。 $C_K(A)_\xi = \{e\}$ ($\xi \in \pi \backslash G$) たり, $(C(\pi \backslash G) \otimes_R M_{2^n}(R)) \times_{\pi \backslash G} C_K(A)$ の双対空間は $\pi \backslash G / C_K(A)$ に同一視出来る。

このことより $(C(\pi \backslash G) \otimes_R M_{2^n}(R)) \times_{\pi \backslash G} C_K(A)$ は $\pi \backslash G / C_K(A)$ 上の連続場の C^* -環 $C_F(\pi \backslash G / C_K(A), \{c(\mathcal{H}_\xi)\}_\xi)$ に同型である。特に \mathcal{H}_ξ は $L^2(C_K(A))$ に同型にされる。(実際, Green [3] の手法を使ふと, $\mathcal{H}_\xi = L^2(\xi) \otimes_R R^{2^n}$ ($\xi \in \pi \backslash G / C_K(A)$) と出来るが, $C_K(A) \approx \xi$ であり, $C_K(A)$ は連結コンパクト群であるから, $\dim \mathcal{H}_\xi = \infty$ となる。) $\pi \backslash G$ は主 $C_K(A)$ -バンドル ($\pi \backslash G / C_K(A)$ 上の) となるから, Dixmier-Douady [2] より $\xi \in \pi \backslash G / C_K(A) \mapsto \mathcal{H}_\xi$ は自明な Hilbert 空間の連続場である。さて Dixmier-Douady [2] より, $C_F(\pi \backslash G / C_K(A), \{c(\mathcal{H}_\xi)\}_\xi)$ は $C(\pi \backslash G / C_K(A)) \otimes C(L^2(C_K(A)) \otimes_R R^{2^n})$ に同型になる。だから $K(C^*(M, \mathcal{F}_H))$ (又は $K(C^*(M, \mathcal{F}_A))$) は, $V = \mathcal{N}_R^*($ 又は $\mathcal{A}_R^* + \mathcal{N}_R^*$) が偶数次元の実ベクトル空間ならば, $K(\pi \backslash G / C_K(A))$ に同型である。即ち, $K(M)$ は $K(C^*(M, \mathcal{F}_H))$ (又は $K(C^*(M, \mathcal{F}_A))$) に同型である。 $K(C^*(M, \mathcal{F}_A))$ は $K^{\dim A}(C^*(M, \mathcal{F}_H))$ に同型であるから, $\dim \mathcal{F}_A = \dim AN$, $\dim \mathcal{F}_H = \dim N$ を使うと, もし $C_K(A)$ が連結 ($\mathcal{G} \neq SL(2, R)$) ならば, $K(C^*(M, \mathcal{F}))$ は $K^{\dim \mathcal{F}}(M)$ ($\mathcal{F} = \mathcal{F}_H, \mathcal{F}_A$) に同型である。もし $\mathcal{G} \cong SL(2, R)$ ならば, $G = \widetilde{SL}(2, R)/\Delta$ と書ける。ただし, $\widetilde{SL}(2, R)$ は $SL(2, R)$ の普遍被覆群であり, Δ は \mathcal{G} の基本群で $\widetilde{SL}(2, R)$ の中心の部分群である。

る。 $G = KAN$ を G の岩沢分解とすると、 $\widetilde{SL}(2, \mathbb{R}) = \widetilde{K}AN$ なる $SL(2, \mathbb{R})$ の岩沢分解をとると、 $K = \widetilde{K}/\Delta$ となる。 $SL(2, \mathbb{R}) = SO(2, \mathbb{R}) \cdot R \cdot R$ という形より、 \widetilde{K} は $SO(2, \mathbb{R})$ の普遍被覆群となる。 $SO(2, \mathbb{R})$ の基本群は \mathbb{Z} であるから、 $\Delta = \pi_1(G) = \pi_1(K)$ は \mathbb{Z} の部分群になる。 $C_{SO(2, \mathbb{R})}(\mathbb{R}) = \mathbb{Z}_2$ となり、 $SL(2, \mathbb{R})$ の中心である。 同様にして $C_K(A)$ は G の中心の部分群となる。よって $C(\pi_1(G)) \times_{\mathbb{R}} P$, $C(\pi_1(G)) \times_{\mathbb{R}} C_K(A)N$ は $(C(\pi_1(G)) \times_{\mathbb{R}} C_K(A)) \times_{\mathbb{R}} AN$, $(C(\pi_1(G)) \times_{\mathbb{R}} C_K(A)) \times_{\mathbb{R}} N$ にそれぞれ同型である。 ただし, $\mathbb{R} = \text{point}$ である。 Connes の Thom 同型定理 (I) より, $K(C^*(M, \mathcal{F}_H))$, $K(C^*(M, \mathcal{F}_A))$ はそれぞれ $K^{\dim N}(M)$, $K^{\dim AN}(M)$ に同型となる。 よって次の結果を得る:

定理 9. $\mathcal{F}_H, \mathcal{F}_A$ を局所対称空間の単位球面バンドル M の Horocycle, Anosov 葉層とする,

$$K(C^*(M, \mathcal{F})) \simeq K^{\dim \mathcal{F}}(M) \quad (\mathcal{F} = \mathcal{F}_H, \mathcal{F}_A)$$

が成り立つ。

注意 5. $K(M) = K(\pi_1(MG/K))$ は Thom-Gysin 完全系列により計算される。

文献

- [1] A. Connes, An analogue of the Thom isomorphism for crossed products of a C^* -algebra by an action of \mathbb{R} , Advances.

Math., 39 (1981), 31–55.

- [2] J. Dixmier – A. Douady, Champs continu d'espaces Hilbertiens et de C^* -algèbres, *Bull. Soc. Math. France.*, 91 (1963), 227–284.
- [3] P. Green, C^* -algebras of transformation groups with smooth orbit space, *Pacific J. Math.*, 72 (1977), 71–97.
- [4] G.G. Kasparov, K-theory, group C^* -algebras and higher signatures, Preprint (1981).
- [5] T. Natsume – H. Takai, Connes algebras associated to foliated bundles, Preprint, Univ. Roma (1982).
- [6] M. Takesaki, Covariant representations of C^* -algebras and their locally compact automorphism groups, *Acta. Math.*, 119 (1967), 273–303.
- [7] P. Tomter, On the classification of Anosov flows, *Topology*, 14 (1975), 179–189.